

レズビアン，ゲイ，バイセクシュアルの当事者支援 活動と強みに着目したナラティブ研究

田中，将司

<https://hdl.handle.net/2324/6787386>

出版情報：Kyushu University, 2022, 博士（心理学），課程博士
バージョン：
権利関係：

氏 名 : 田中 将司

論 文 名 : レズビアン, ゲイ, バイセクシュアルの当事者支援活動と強みに着目したナラティブ研究

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

本論文では、本邦のレズビアン, ゲイ, バイセクシュアル (以下, LGB と略記) が、自身の性指向をどのように経験をしているかについて、特に「LGB であることの強み」に着目し、個別性を尊重したアプローチによって明らかにすることを目的とした。

第2章では、本邦のLGBの性指向に基づく経験と、その経験に影響を与える要因について探索し、一モデルを示すこととした。本論文は個別性の尊重を問題意識としているが、まずは本邦のLGBを対象に、強みを含む様々な経験を総合的に捉えた「客観的」、「一般的」知見を示した後、その知見から着目すべき強みに関する経験や現象を見定めた方が望ましいと考えられたためである。結果の多くは先行研究で説明できる経験であったが、特筆すべき点が2点あげられた。まず、他の当事者に対する支援的態度に着目した。当事者支援団体に所属するなどしてアクティヴィストになる者もいれば、アクティヴィストなどに賛同するが、実際の活動はない当事者もあり、当事者によって支援的態度や行動に差があることを見出した。この差にどのような背景があるのかは本研究で明らかにならなかったが、より他者志向的な経験の方が、当事者にとって自分の強みと認識されやすいことが考えられたため、当事者支援活動に至るほどの支援的態度や行動が生じる背景を明らかにすることが、研究の展望の一つになった。2点目に、LGBがポジティブにもネガティブにも他者の期待や言動に配慮し、かつ、周囲に「謙っていた(自分の立場を低くした態度をとっていた)」ことを取り上げた。このLGBの態度は、新たな知見であった。また、経験に影響を与える要因に関する結果から、家系のつながりや家族内の伝統的価値観の重視が根強いこと、他者の期待や言動に配慮し、謙る態度を形成したと考察された。

第3章以降は、LGBであることの強みの中でも、第2章で研究の展望としてあげた、当事者支援活動に至るほどの支援的態度や行動が生じる背景に着目した。各章で一人のLGBへのインタビューを対象ナラティブとしながら、性指向に基づく経験を明らかにした。第3章は、当事者支援活動を行い、トランスジェンダーでバイセクシュアルのBのインタビューを対象ナラティブとした。Bが当事者支援活動に至った背景には、性指向に限らず、Bのジェンダーや、LGBTQ+コミュニティでの二項対立的価値観に基づくネガティブな経験などがあつた。特に、B自身が当事者支援活動で支えられる必要のあつたことについて取り上げた。LGBTQ+コミュニティでの二項対立的価値観に基づくネガティブな経験を経て、Bは当事者支援活動に自身の居場所を作ろうとしていた。他者ではなく、自分が支えられようとしていた点は、強みに関する先行研究にはみられない知見であった。

第4章は、第3章と目的は同じだが、当事者支援活動を行い、高齢期の当事者(ゲイ, C)のインタビューを対象ナラティブとした。Cが当事者支援活動に至った背景にも、性指向に限らず、『学生運動』、『エイズパニック』の時代を生きることなどがあつた。特に、当事者支援活動に『セルフ

ヘルプ』のみを求めたことについて取り上げた。C は、ゲイであることで異性愛中心主義の規範や性規範に捉われずに生きてきたことを語り、その生活をポジティブに捉えていたが、『エイズパニック』によってその生き方を一変させなければならなくなった。一つ的手段として、『エイズ』と結びついたゲイであることに対するネガティブな評価を『セルフヘルプ』するために、当事者支援活動に携わっていた。自分が支えられようとしていた点はBと同じだが、Cの場合、実際の当事者支援活動は、他者も自分も支えられるものではなくなっていた。Bとの比較から、他者を支える目的や、同性愛への自己受容の状態がほとんどなく、自分が支えられる目的のみ寄せており、さらには、性規範に捉われないという、かつてCがポジティブに捉えていた生き方を肯定されることにはならなかったため、他者も自分も支えられなかった当事者支援活動につながったと考えられた。

第5章は、中年期の当事者（レズビアン、H）のインタビューを対象ナラティブとした。Hが当事者支援活動に至った背景にも、性指向に限らず、仕事や人間関係、年齢などの影響があがった。特に、レズビアンである『自分自身も見つめ』ることについて取り上げた。レズビアンであることによって経験してきたネガティブな出来事について、Hはこれまで『脇に置いて』過ごしてきたが、そのような『自分自身も見つめ』、自分の生き方について考える機会にも当事者支援活動はなろうとしていた。ただし、Hの場合も、実際の当事者支援活動は、自分を支えられるものではなかった。それは、差別や偏見がなくならないことを、支援者を担うからこそ理解しているためであった。当事者支援活動を辞めることも考えにいれているほど『しんどい』思いをしており、そのような経験が先行研究で述べられてきた当事者支援活動の強みとしての実感も得づらくさせると考えられた。

第6章では、第3章～第5章の当事者の、自分も支えられるために当事者支援活動を行っていたことに主に着目し、先行研究や第2章との差異、本研究の意義をまとめた。本研究の3人のナラティブはそれぞれ個別的なものであるが、自分も支えられるために当事者支援活動をしていた。Bは自分の居場所づくりのために、Cは『セルフヘルプ』のために、Hはレズビアンであったことでネガティブな経験をしてきた『自分自身も見つめ』るために、当事者支援活動を始めた。さらには、「実際に自分も支えられていると当事者支援活動の中で実感されていること」が、先行研究で述べられた強みとして当事者支援活動が経験されるために重要であったことも本研究で示された。他者も自分も支えられる機会になっていたと思われるBの語りがあった一方、自分も支えられていなかったことで他者を支える強みが経験されづらくなっていたC、Hの語りもあり、その比較から考察がなされた。

第7章では、各章の研究について概要をまとめ、本論文の成果を整理した。本研究の成果はいくつかあげられるが、特に、第6章で示した、強みとして当事者支援活動を行う背景に、自分も支えられるという目的と実感が必要であったことを取り上げた。心理学分野において、当事者支援活動は主に他者を支える強みと捉えられてきたが、自分も支えられる強みであるという理解の方がより適切であると考えられ、その理解の変容に言及できたことは本論の大きな意義と考えられた。